論文内容の要旨

論文題目　　探偵小説のペルソナ　奇想と異常心理の言語態
氏名　　小松　史生子

アカデミズムの領域における探偵小説研究は、ここ十年ほどの期間に、文化研究やカルチュラル・スタディーズ、読者論、メディアミックス研究などの方法論の導入によって、テクスト分析の新たな展望が開拓され始めてきている。それまでの作家論を中軸にした、その作家の作品をめぐる書誌学、またそうした書誌調査に基づく単線的な探偵小説史の執筆とは明らかに一線を画した姿勢で、探偵小説を時代のコンテクストに位置づけられた言説場の一様態として理論的に検証する作業が試みられてきている。

本論は、こうした学問的領域の展開の経緯とほぼ研究の歩みを同じくし、探偵小説テクストにおけるペルソナ造型という問題の流れを、テクストが書かれた当時の言説コードと照応しつつ、そこから派生する普遍的なジャンルの葛藤、情緒共同体に属する読者の期待の地平に対峙する〈作家〉の恣意性の魅力として導き出そうと意図したものである。

探偵小説におけるペルソナ問題とは、江戸川乱歩の有名な定義「探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学である」（「探偵小説　定義と類別」（『幻影城』　岩谷書店　昭和二十六年五月）が独り歩きして、あたかも探偵小説においては登場人物の造型を重要視するまなざしは必要とされないとみなされるような傾向にあって、主に〈探偵〉というキャラクターが果たす物語機能をどう捉えるかについての一連の考察のことである。昭和十一年頃から戦後にかけて、江戸川乱歩と木々高太郎の間で戦われた探偵小説純文学論争が契機の一つとなって、動機を重視す

る文学派と、トリックを重視する本格派と、二つの陣営に探偵小説作家達は大きく分かれた。動機を重視すると、より人間心理の奥深さを描くことができ、探偵小説は文学に格上げされるとする文学派と、探偵小説はあくまで探偵小説であって、それが文学性を帯びるかどうかよりも、まずはトリックという他のジャンルにはない特質を追求するべきとする本格派とが、評論誌や同人雑誌などのメディアを介して激しく論争した。この論争の流れは、双方の言い分が噛み合わず不毛な水掛け論に終わることもありはしたが、やがて木々高太郎の後継者格としてデビューした松本清張による社会派ミステリの台頭によって、いっそう先鋭化されていくことになる。

しかし、動機を重視し人間の内面を云々した松本清張によって否定された当の本格派に属する江戸川乱歩自身が、戦後の数他の探偵小説評論の本文中でトリックを説明する項目内に、トリックの延長上として〈探偵〉および〈犯人〉の叙述描写や性格設定に拘泥する姿勢を見せており、ここに探偵小説におけるペルソナ問題とは、単なる文学派／本格派という区分けでは捉えられない奥行きを持っていると推測される。

さらに、現代に至って、笠井潔『探偵小説論Ⅱ　虚空の螺旋』（東京創元社　平成十年十二月）が提唱した、世界戦争と探偵小説ジャンルの相関性の考察における、大量死へのアンチテーゼとして〈特権化された個人〉が据えられるという観点は、ジャック・デリダの脱構築理論を参照しつつ、「探偵小説の描く人間は、探偵小説形式に適合的な、抽象化されたパズルの項でしかない」とする挑発的な言辞を世に問うた。笠井潔の提言は、折から勃興し始めた探偵小説の新潮流である新本格派の台頭と軌を一にしたものでもあったが、彼らの評論および実作がなさんとしたことは、探偵小説のナラティヴにおけるペルソナ造型の際の語りの自覚であったとみることができる。法月綸太郎は笠井の論を踏まえた上で、探偵小説の中で推理を紡ぎ出す〈探偵〉の、その推理の真実性を、作品内の登場人物達は検証することが出来ないというメタテクストの理論的矛盾を指摘し、これをゲーデル的帰結と称したが、自らがパズルの項であることに自覚的に煩悶するペルソナとしての〈探偵〉という存在は、まさに探偵小説のディスクールの様態とその志向性を物語っているといえる。

以上のような観点から、本論は江戸川乱歩の作品群を中軸にしつつ、乱歩テクスト周縁の作家のテクストを幾つか分析対象として、それらテクスト群が真正面から取り組んだとおぼしき犯人と探偵を描く際の問題意識と表現コード選択の跡を追い、探偵小説ジャンルをめぐるペルソナ問題の流れについて考察と検証を試みるものである。

第一部は、「翻案コードの表象としてのペルソナ」として、主に明治から大正にかけて翻訳ならぬ翻案という形態で輸入された海外の探偵小説至近ジャンルに登場するキャラクターが、どのような解釈コードのもとで表象されていったのかを、三遊亭園朝、黒岩涙香、村山槐多、そして江戸川乱歩の作品の分析を通して検証していく。

第一章では、三遊亭円朝『欧州小説　黄薔薇』（明治二十年）を採り上げるが、この作品

は、探偵小説史家・中島河太郎によって黒岩涙香の翻案テクストの先鞭となったと位置づけられている。この作品の言説分析を通して、初期探偵小説の文体に影響した翻案言説のコードを摘出し、それがペルソナをどのように造型していったかの過程を追う。

第二章では、〈人獣〉というモチーフを通して、黒岩涙香から村山槐多、そして江戸川乱歩へと至るテクストの系譜を辿る。黒岩涙香の『怪の物』（明治二十八年）はイギリス小説の翻案物で、人間と蛇の混血児の恐怖を描いた作品である。一方、村山槐多『悪魔の舌』（大正四年）は、或る日突然身体が猫属のそれに変化してしまった青年の悲劇を語る作品である。江戸川乱歩は、先行する両者のテクストを下敷きに、明智小五郎と人獣の死闘を描いた通俗長編『人間豹』を昭和九年に「講談倶楽部」に連載した。この三つのテクストは、それぞれに〈人獣〉というモチーフを描く際の位相を異にし、そこに興味深いディスクールの参照関係が生じている。

第三章では、江戸川乱歩『幽霊塔』（昭和十二年～十三年）を扱い、翻案探偵小説としての自覚を伴った語りのストラテジーを論じている。乱歩『幽霊塔』は、黒岩涙香『幽霊塔』（明治三十二年～三十三年）の翻案であり、その涙香『幽霊塔』はイギリスのA・M・Williamson による『A WOMAN IN GREY』（1898 年）を翻案したものである。つまり、乱歩『幽霊塔』は、翻案作品の再翻案化という二重のストラテジーを背負ったテクストである。こうした二重のストラテジーによって造型される探偵小説のペルソナとはどういったものであるのかについて、翻案時の語彙の選択コードを追いながら考察する。

第二部では、「モダニズムが煽る異常心理構造としてのペルソナ」として、探偵小説というジャンルが確立していく過程において、都市のモダニズム表象の裏面に在って、その表現コードを支えた〈正常／異常〉の言説群の枠組みを見据え、それが探偵小説の〈探偵／犯人〉のペルソナ対立に直結していく位相を、江戸川乱歩、横溝正史の作品の他、川端康成、堀辰雄などの同時代テクストとの交錯も絡めながら考察していく。

第四章はモダニズム文学の中に見出される水族館幻想というものに着目し、資料体として江戸川乱歩『パノラマ島奇談』（大正十五年～昭和二年）を中心に扱い、本作品を掲載した雑誌「新青年」誌上で期せずして展開された水族館幻想にアプローチを試みながら、明治から大正へと繋がる想像共同体の作用を俯瞰して、昭和モダニズム文学の範疇としてとらえられる探偵小説が描き出す〈都会人〉というペルソナ造型の位相を、同じく水族館幻想を扱った同時代テクストである川端康成『水族館の踊り子』や堀辰雄『水族館』と比較して分析する。

第五章は、探偵小説ジャンルの普及と医科学言説の交錯を検証する上で、江戸川乱歩が後期長編の執筆に踏み切る実験作としてターニングポイントとなった重要なテクスト『孤島の鬼』（昭和四年～五年）を資料体として用いる。このテクストを資料体に用いることによって、これまで後期長編のテクスト分析として一応の成果を挙げた先行の方法論を意識しつつ、そこにペルソナ造型考察の視点を取り入れて、乱歩の後期長編に研究対象として

の問題系を見出す可能性を――文学という定義自体の再検討をも含めて――探っていく。〈外科医〉という言葉が喚起するコノテーションが、民間医療と近代医療の狭間で重層化していた医科学言説のコードを導き出し、それが当時の探偵小説のディスクールに深い影響を与えている事実を、民俗学言説、近代医療言説の現場の資料を追いながら検証する。

第六章は、横溝正史の中期の佳作『真珠郎』（昭和十一年～十二年）を扱い、密室というモチーフを描く際に、横溝テクストが召還した社会的環境に基づくリアリティについて、相馬事件の報道や東京帝国大学精神医学部教授呉秀三らによる調査資料が語るところの座敷牢をめぐる言説を考察し、さらにそうした社会的環境に依るリアリティの補填に加えて、雑誌「変態心理」（大正六年創刊）などが普及させたフロイト精神分析が探偵小説のトリックとして利用されている現場を論じる。

第三部では、世界戦争の世紀をくぐり抜けた探偵小説ジャンルの文体が、戦時下、そして戦後において、どのようなディスクールでテクスト内のペルソナ造型に取り組み、且つその造型にどのような問題意識を込めようとしたのかについて、時局と抵触するギリギリの地点で文体を死守した小栗虫太郎のテクスト、および戦後のジャンル牽引の役目を全身で負いながら自らのテクスト創造には枯渇していった江戸川乱歩の歩み、そして戦後の長編探偵小説の黄金期を実作で先鞭づけた横溝正史の時代認識を追いつつ論証していく。

第七章は、〈密林〉の文体と称して、横光利一『旅愁』と共に「文藝春秋」の時局シーンを飾った小栗虫太郎『紅軍巴蟆を越ゆ』（昭和十四年）を分析対象に挙げ、小栗虫太郎という作家における極めて特異な言語楼閣の作品世界とそのペルソナ造型を、戦時下のメディア言説の位相から再検討する。

第八章は、横溝正史『本陣殺人事件』（昭和二十一年）の分析を通して、戦後文学としての〈本格推理〉を論じる試みである。この作品が〈家を巡る物語〉であることは従来から指摘されているとおりであるが、ここで物語られている〈家〉が、歩くという経験行為をもって体感されるたたずまいとしての家であるという点に着目し、戦後の住宅事情と〈密室〉モチーフの相関性について、戦後の身体と家屋にかかわる文学状況を参照しながら、プライベートを問うペルソナとして検証する。

第九章は、江戸川乱歩の戦後の活動と実作の激減という事態を、経済幻想をめぐるナラティヴの観点から『影男』論として考察する試みを展開する。『影男』（昭和三十年）は明智小五郎が登場する最後の通俗長編であり、この作品において〈犯人〉と〈探偵〉はもはや対幻想とならないことを、戦後の欲望形態のパーツ化に即して読み解く。乱歩『影男』における明智小五郎というペルソナの消失を受けて、新たにその断絶的後継として高木彬光『白昼の死角』（（昭和三十四年）というコン・ゲーム小説の犯罪者のペルソナが造型される過程をとらえる。